

法師浜 桜白（ほしはま・おうはく）

1、プロフィール

報道畑一すじに歩きながら各地で俳句の研鑽普及に努め、八戸小唄、八幡馬の唄等の作詞で八戸の名を全国に広めた。旧俳諧の第14世星霜庵を嗣ぐが、金子兜太の新風も学んだ。

<生没>

1900(明治33)年10月4日 ~ 1979(昭和54)年4月15日

<代表作>

句集『桜白句集』『心音』

<青森との関わり>

八戸市生まれ。県立八戸中に学ぶ。新聞記者退職後帰八。八戸文化協会会長。八戸市民憲章作成。八戸小唄等多数作詞。

2、作家解説

「唄に夜明けたかもめの湊」で始まる八戸小唄は民謡として全国に普及しているが、世に出たのは昭和6年だった。当時作詞者については、神田市長・記者クラブ・北村古心の合作とされていたが、これはその時新聞記者だった法師浜桜白の作詞によるもので、その著作権は八戸市に寄贈してしまい、この事は長年うやむやになっていたが、記者生活を退いて帰八したのを機に明確にされ、その後も「八幡馬のうた」「安全音頭」等を作詞、広く親しまれ、八戸市民憲章草案など、八戸市への貢献大である。本名直吉。旧制青森県立八戸中学四年在学中、父の稼業が不振となり中退、その後独力で早稲田大学通信教育国文科に学ぶ努力の人であった。温厚な風貌ながら作品に秘められた強固な魂をかいま見ることができる。小学校教員から新聞記者に、定年退職後も、放送、新聞社顧問等々、終生報道に携わった人生だった。従軍記者として前線に在った時乗った複葉の軍用飛

行機で耳を痛め宿痾となった。「心音の聞こゆる夜は雪積る」という名句を後年残したが、その宿痾による心耳が成したものであろう。

記者の生活と同時に研鑽していったものに俳句がある。大正 11 年互扇楼前田桜曙に入門、旧派の俳諧を学び、戦線に在っても、後の毎日新聞各地支局長時代も、自らを磨くほかに、その地その地で句誌を主宰し、俳句を広めた。第一句集『桜白句集』は、先輩、後輩の記者らの手によって刊行され、定年後社団法人ヘレン・ケラー学院教務主任を務めた時も、点字俳誌「ともしび」を発行、その心の慰めとなった。点字俳句歳時記刊行は、終生の念願だったが果たす事は無かった。帰八後、廃れかけていた八戸藩伝統の俳諧を嗣ぐ八戸俳諧倶楽部を復興、昭和 42 年第 14 世星霜庵を嗣号。藩主の名跡を嗣ぐにふさわしい風格を備えた最後の人かもしれない。加えて金子兜太に師事、新しい俳風も自分のものとし桜白俳句を確立した。句集『心音』及び記者の記録を納めた一冊等あり、師前田桜曙との師弟句碑を始め句碑4基。今も徳を慕う人が多い。

3、資料紹介

○『心音』

図書

1980(昭和 55)年4月 15 日

185mm × 135mm

桜白死後、1周忌を期して桜白句集刊行会によって刊行されたもの。第1句集『桜白句集』も含め、1700 余句の中から 550 句を厳選し編集した。旧派時代より 50 数年に及ぶ句歴の中から生まれた作品はどれも馥郁たる香気が漂っている。